

[研究ノート]

秋田市における百貨店の 歴史的変遷に関する研究

—明治・大正期の秋田市—

市 川 聖

1. はじめに
2. 日本の百貨店の始まり
3. 明治—大正期における秋田市の百貨店
4. 考察と今後の研究課題

1. はじめに

(1) 研究の背景

一般的に地理学における流通システムには卸売業や小売業が存在する（竹中編2015）¹⁾。卸売業はメーカーによって生産された商品をスーパーやコンビニといった小売業に運び、小売業では、消費者が買い物しやすいように少量で多くの種類の商品を取り揃えて販売する。近年では、チェーンストアの発展など小売業の販売力が強くなっていることから、大手スーパーなどが食料品卸売業と提携して、自らの店舗網向けの効率的な商品配送システムを構築する例がみられるようになった。

近年、新型コロナウイルス流行以降に百貨店の閉店が顕著になった²⁾。とりわけ、昨今の百貨店は地方都市では施設の老朽化や商品拡充の未整備により地元百貨店が店舗閉鎖となる事例も相次いでいる。この背景には、1990年代のバブル景気の崩壊による平成不況とモータリゼーションの急速な進展に伴う郊外型ショッピングセンターやロードサイドショップの登場も根底にあるとされている。このように近年の百貨店を取り巻く環境は課題を多く抱えている。

そもそも日本における百貨店の始まりは、三越呉服店が抱負を全国紙で広く一般に報道した「デパートメントストア宣言」だとされている（藤岡2006）。この宣言の中で三越は、呉服にとらわれることなく、衣服装飾に関する商品の品揃えを拡大するという方針を提示した。つまりそれは旧来型の呉服店が、欧米のような百貨店へと成長するためには取扱商品の拡大が必須であるという三越の認識を示したのである。この宣言以降、都市部を中心に百貨店が急速に拡大し、近代的な日本の百貨店は取扱商品を増加させたことでワンストップショッピングとなるように消費者の購買行動に大きな変化をもたらした。日本の百貨店は明治末期から大正初期にかけて成長し、地方都市ではかつての呉服店などを前身に持つ百貨店の開店がみられた。さらに大正期には大阪でターミナルデパートの開店、昭和期のスーパーマーケットの導入によってさらに多様化した販売形態となった。

（2）研究の目的と方法

前述した研究の背景を踏まえて、本研究では地方都市に位置づけられる秋田県秋田市（以下、「秋田市」）を調査対象地域として百貨店に関する歴史の変遷と今後の百貨店の見通しを模索することを目的とした。研究の方法は、秋田市の百貨店に関する歴史の変遷について文献調査を中心に行った。具体的には第一に、『秋田市史』（2004）および秋田市の郷土資料を用いて、秋田市における明治－大正期の呉服店およびそれに関係する産業の経営形態、店舗の分布、当時の秋田市の経済情勢などの基本的な内容を整理した。第二に、当時の新聞と写真の歴史資料から呉服屋および百貨店の歴史の変遷についてまとめた。これらを総合的に考察し、今後の研究課題を検討した。

（3）調査対象地域の選定理由

秋田県は東北地方の北東部に位置しており、北部は大館市を越えて青森県、東部は奥羽山脈を挟んで岩手県、南部はにかほ市を越えて山形県に隣接している。近年の秋田市は新幹線による首都圏との経済交流がさかんに行われ、一方で秋田県内の他の地域では、観光産業で大館市の秋田犬や横手市のかまくらを用いた地域振興が挙げられている。しかしながら近年は、人口が90万人台になり、これに伴い高齢化率が50%を超える地域もある。本研究で対象としている秋田市は人口がおおよそ30万人で、主産業は第三次産業が中心であり、近年では地場産業の木材・木製品製造や企業誘致によるICT関連企業の進出が著しい。

ところで、本研究で秋田市を調査対象地域に選定した理由には次の2点がある。第一に、秋田市では明治末期から大正初期にかけて「デパートメントストア宣言」の流れに沿うように呉服店が百貨店へ変化したこと、第二に、全国の六大都市以外の都市では百貨店が少なかったにもかかわらず、大正時代初期には東北地方でも屈指の百貨店が存在したことが挙げられたためである（図1）。図1では、地方都市の百貨店の店舗数が第一次世界大戦期に増加し始めたことがわかる。第一次世界大戦期の好況の中で一般庶民の購買力が向上し、高級品の需要が激増したためである。それまで地方都市には百貨店が少なかったため、百貨店の必要性に迫られたことが契機であった。

また戦前の百貨店に関する先行研究は次の通りである。加藤（2018）では1930年代における東北地方の百貨店催物の視点から岩手県・山形県・福島県の事例についてまとめられており、末田（2022）では日本における百貨店業の会社史資料の視点から戦前の百貨店経営がまとめられているものの秋田県に関する資料は記載されていなかった。以上の観点から、明治－大正期の秋田市の百貨店についてまとめることにした。

2. 日本の百貨店の始まり³⁾

本研究では、秋田市の百貨店について言及することから、本節では国内における百貨店の歴史を概観する。日本の百貨店の始まりは1904（明治37）年12月に、三井呉服店から社名を変更した株式会社三越呉服店の専務取締役の日比翁助が、「米国に行わるるデパートメントストアの一部を実現致すべく」と「デパートメントストア宣言」を打ち出したことによるとされる。これを契機として翌年1905（明治38）年には、三越呉服店は全国の主な紙面に「デパートメントストア宣言」の広告を掲載したことが日本の百貨店の始まりとされている。さらに1906（明治39）年、欧州の百貨店を視察した日比翁助は、イギリスの百

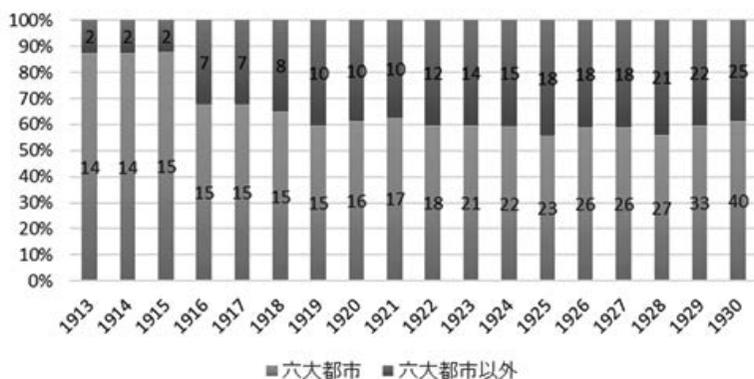


図1 大正期の全国百貨店の店舗数の推移
出所) 大岡 (2009)、10頁より作成

表1 デパートメントストア宣言前後の三越百貨店に関する動向

1893 (明治26) 年	「越後屋」は「三井呉服店」に名称変更
1895 (明治28) 年	陳列売場にガラスのショーケースを設置
1896 (明治29) 年	座売りの廃止
1899 (明治32) 年	全国に向けて通信販売を開始
1904 (明治37) 年	デパートメントストア宣言により「三越呉服店」に名称変更
1907 (明治40) 年以降	くつ、洋傘、石けん、カバン、美術品、貴金属などを販売
1914 (大正3) 年	ルネサンス式建物の百貨店の誕生 (地下1階地上5階)
1923 (大正12) 年	関東大震災に伴い各地でマーケットを開催

出所) 飛田 (2016)、51頁より作成

百貨店「ハロッズ」を目標と定め、三越呉服店の近代化を促進させた⁴⁾。この頃から、次々と百貨店を目指す大型店舗の建設が始まった。表1には三越呉服店の主な動向を示した。ここで三越を挙げたのは日本の百貨店の始まりとし、呉服店から百貨店に移行させた先端の経営方式を採用していたことがわかる。表1から三越は明治期には座売りをいち早く廃止するとともに、通信販売といった先進的な販売方法を導入していたことがわかる。また明治末期には、西洋文化を導入し、先進的な商品を扱っていたこともわかる。前述した三越の流れを受けて、当時の白木呉服店や高島屋呉服店も洋風化の店舗を開店するようになった⁵⁾。白木呉服店は、1903 (明治36) 年に洋風3階建ての店舗を開店させた。高島屋呉服店は、1907 (明治40) 年に大阪店を洋風店舗を増改築した。また、松坂呉服店は同年に、「東京デパートメントストア方式の外観を備えた最初の建物」と言われた3階建て洋風の店舗を今川橋に新装開店した。三越呉服店は1908 (明治41) 年に三階建ての洋風建築として仮営業所を日本橋に新築し、大丸呉服店は通旅籠町の店舗を総銅板造りの洋風店舗に改装した。

また当時の百貨店の企業形態は呉服店の頃から導入されていた。1897 (明治30) 年にそごう呉服店が「合名会社」化を導入したことを皮切りに次々と会社組織が取り入れられた。1903 (明治36) 年に松屋呉服店が「合名会社」、1904 (明治37) 年に三越呉服店が「株式会社」、1907 (明治40) 年に大丸呉服店が「株式合資会社」、1909 (明治42) 年に高島屋呉服

店が「合名会社」、1910（明治43）年にいとう呉服店（松坂屋）が「株式会社」となった。このようにして従来の呉服店は、（i）経営方式は合理的に、（ii）販売商品は呉服以外にも、（iii）店舗形態は西洋建築に、（iv）企業形態は会社組織に、変化したのである。

3. 明治－大正期における秋田市の百貨店

（1）明治－大正期の秋田市の社会構造

図2は明治期の秋田市中心部の地図である。秋田駅（写真1）から千秋公園を通り、①までおよそ1kmである。秋田市ではこの区間を広小路と呼んでいる。広小路は久保田藩藩主・佐竹氏の居城が存在した城下町であった。その後、明治期には秋田高等裁判所、秋田地方裁判所、歩兵第17連隊（写真2）、さらには、1878（明治11）年頃から県立図書館が建てられ、官庁街の様相だった。その中の一角に木内雑貨店があった。そして、各種公共施設が移転移築していくと、秋田駅の乗降客を相手にした商店が秋田駅から伸びていき、木内雑貨店を西端にした繁華街としてアーケード街を形成していくのである。その向かい側には、明治中期頃から新田目呉服店が営業していた。このように広小路の変容は激しいものであった（写真3）。写真4は現在の写真3の場所である。同じ場所に木内雑貨店は立地しているが、周辺の多くの店舗で閉店が相次いだ。

ところで明治期の秋田町の人口は約3万1,860人であり、市制が施行された1889（明治22）年には2万9,297人となった。この当時約2,000人の人口減少があったが、1918（大正7）年には人口が約4万人にまで急速な増加を見せている。この急速な人口増加の背景には1898（明治31）年の歩兵第17連隊の移駐や1902（明治35）年の奥羽北線と1905（明治38）年の奥羽南線の開通が影響した。さらに1924（大正13）年には、秋田県と新潟県を結ぶ羽越線も全通した。これらの鉄道の開通はその後の秋田県の政治、経済、文化に多大な影響を与えたとされている⁶⁾。

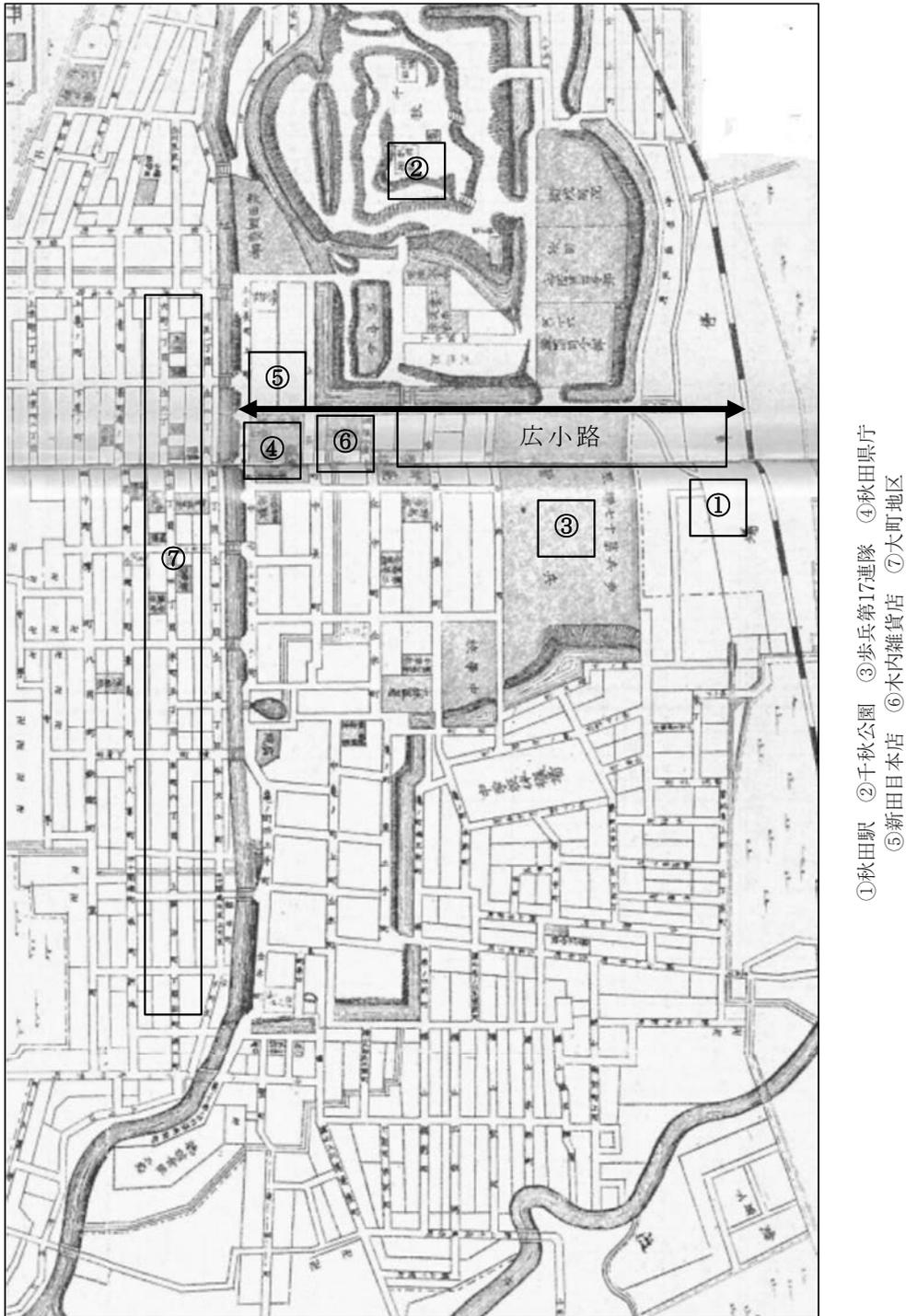
これに加えて1889（明治22）年には秋田市内でも交通網の発展があり、同年7月には秋田馬車鉄道会社が設立された。これにより秋田市大工町から土崎港清水町までの約5kmの交通整備がなされていた。さらに大正期にはいると、馬車鉄道から電力に切り替えられ、1922（大正11）年には電車が運転されるようになったのである。このように秋田市では、明治中期から大正期にかけて都市化と交通網の整備が確実にされるようになったのである。これらの他にも秋田市では、1874（明治7）年に秋田魁新聞の発刊、1914（大正3）年には黒川油田の発掘、1917（大正6）年の雄物川改修工事の起工など多様な事業で活性化し、秋田市が城下町から消費的商業都市へと変化する基盤が形成されたと考えられる。

（2）明治期における主産業としての繊維産業

表2は明治期の秋田市の職業別戸数を示しており、秋田市は周辺の地域よりも主として織物などの繊維産業と公務業が相対的に高いことがわかる。次に表3は、秋田市における明治期の主産業の工場数を示しており、1892（明治25）年から1907（明治40）年頃までには絹布類の工場数が増加している。これに対して、秋田市の歴史を前述したように鉄道の開通に伴う秋田駅周辺活性化や歩兵第17連隊の移駐による物品需要により秋田市では繊維産業が主産産業になったと考えられる。

一方、『秋田市史』（2004）では、1877（明治10）年代の秋田町で最も盛んな産業は繊維

産業であり、なかでも絹織物業と綿糸・綿織物業がその中心となっていたことが記録されていた⁷⁾。さらに1907（明治40）年頃には秋田市で洋服裁縫を扱う主要な工場も形成された



- ①秋田駅
- ②千秋公園
- ③歩兵第17連隊
- ④秋田県庁
- ⑤新田目本店
- ⑥木内雑貨店
- ⑦大町地区

図2 明治期の秋田市中心部の地図
出所) 無明舎 (1984)、20-21頁より作成



写真1 明治35年の秋田駅停車場広場
出所) 脇野 (2009)、142頁

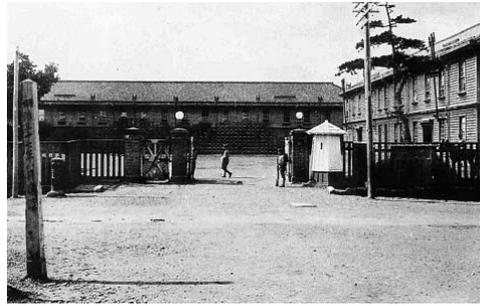


写真2 歩兵第17連隊営門付近
出所) 無明舎 (1984)、14頁



写真3 大正初期の広小路
出所) 脇野 (2009)、92頁



写真4 現在の広小路 (写真3と同じ場所)
出所) 2022年4月24日筆者撮影

表2 明治期における秋田市の職業別戸数 (単位: 戸)

		秋田市	南秋田郡	河辺郡			秋田市	南秋田郡	河辺郡
農 業		42	6,903	3,433	商 業	物品販売	936	1,433	315
漁 業		2	848	176		仲 買	13	101	24
工 業	採 鉱	30	56			旅客宿 飲食店	168	73	17
	金 属	142	265	19		その他	237	179	31
	織 物	32	4	2		小 計	1,354	1,786	387
	飲食器	185	135	6	交通業	45	168	20	
	装 飾	213	163	4	公 務	1,131	598	157	
	建 築	315	367	104	日雇労働者	653	1,234	707	
	その他	370	549	148	雑 業	92	434	111	
小 計	1,287	1,539	283	計	4,606	13,510	5,274		

出所) 秋田市編『秋田市史』(2004)、306頁より作成

様子である。この当時の絹織物業界で活躍していたのは、県営機業場（のちの秋成社機業場）と、秋田織物会社、秋田織絹社の三社である。しかし秋成社のように松方デフレの中で、経営が次第に苦しくなり、販路が開拓できずに職工数を半分に削減した企業もあった。

(3) 大正期の呉服店および百貨店

表4は大正初期の秋田市に存在していた代表的な百貨店および洋風化した店舗の一覧、図3ではその分布を示している。図3は大正期の秋田市であり、明治期と比較して、写真5から写真12のような洋風化した店舗が増加した。秋田市の大正期は、不況と物価高騰の中で始まるものの市民が西洋文化を身近に取り入れる様相であった。大正初期には日活直営の劇場や秋田電気会社による公園の整備が行われていた。また明治期と異なり、広範囲にわたる商業圏が形成されるようになった。本項目ではとりわけ新田目呉服店（のちの「新田日本店」）（写真5-8）の事例について紹介する。先に他の店舗について簡潔に触れておく。現在の秋田市で営業を休止している木内雑貨店（写真9）は、明治期より現在まで同じ場所に位置しており、測量製の機械、文房具一式、運動用具など幅広く、流行に遅れることなく販売形態を確立していた。一方で辻呉服店（写真10）は、多様な呉服販売を流行にあわせた経営を採用していた。大島商会（写真11-12）は系列店の2店舗を経営し、洋風化した建築物で当時最新式の販売形態を採っていたとされている。これに加えて大島商会では、洋風の飲食店を建物内で経営していた。しかしながら大島商会は当時の先端的な経営手法を導入するも秋田駅から離れていたことが理由で経営業績が伸びなかった。

新田目呉服店は、前身の新田目小助商店であった明治中期には和風建築でありながらも「秋田市唯一のデパート形式の店で、呉服太物、和洋雑貨、飲食料品等を扱い、ここに来れば何でも揃った」との記載があった⁸⁾。さらに岩田編著（1973）によれば、「広小路角に明治中期に新田目小助呉服店、のちの新田目デパートとなった」との記載があった⁹⁾。そして、「この新田目デパートが近代商法の草分け的な存在である木内デパート」との記載があるため、新田日本店は比較的に当時からすると先端的な経営形態を導入していたと考えられる¹⁰⁾。今村義孝（1980）によれば、大正初期にはさらに新田日本店は「油絵大広告を看板とする秋田唯一のデパートメントストア式大店舗。呉服太物や洋雑貨飲食料品等の販売に当たった。店頭の乳母車、自転車も商品であろう」とあるため、大正初期には大規模な百貨店へと発展したといえる¹¹⁾。

しかしながら、この新田日本店は大战景気の反動から慢性的な不況を招き、一方で当時は拡大傾向にあった株式形態の企業の脆弱性が影響したこともあり閉店に至った¹²⁾。その際には1923（大正12）年の秋田魁新報では、不況によって閉店した新田日本店を指して、「東北唯一の美観とまで言われた秋田市広小路の偉観新田目の三階建てデパートメントストア」との記載があった¹³⁾。新田日本店は東北地方でも大規模な百貨店であり、その経営手法も都

表3 明治期の設立された業種数（単位：社）

	1892年 (明治25年)	1897年 (明治30年)	1902年 (明治35年)	1907年 (明治40年)
絹布類		7	7	10
印刷業・活版業	3	3	4	6
米等	1			
金銀細工・銅等		1		4
その他			4	1

出所) 秋田市編『秋田市史』(2004)、392頁より作成

市部の百貨店に劣らないものであった。これらの内容から、大正期に秋田市で大規模な百貨店が根付くことができる基盤がなかったとも考えられる。

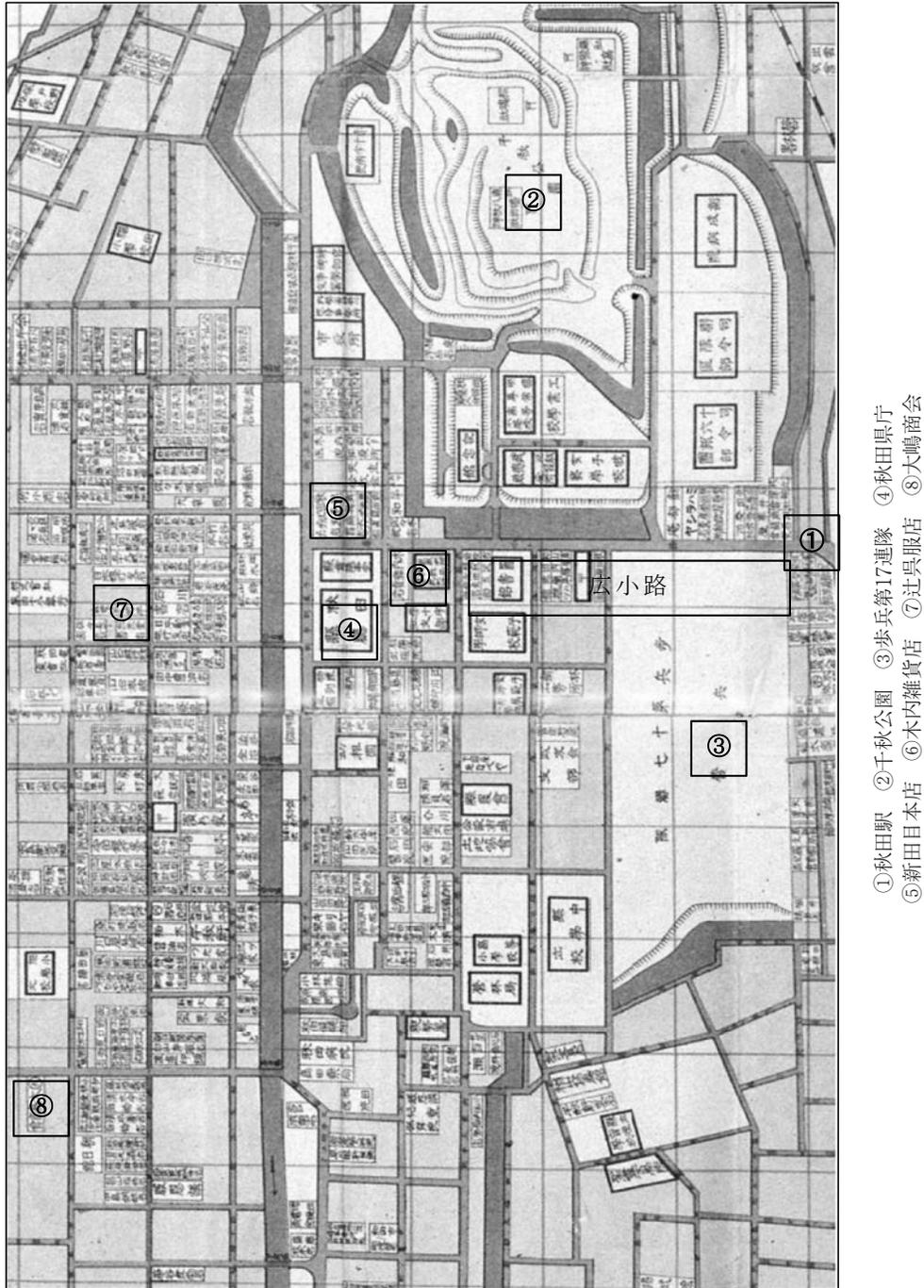


図3 大正期の秋田市中心部の地図
出所) 無明舎 (1984)、100-101頁より作成

表4 大正期における秋田市のデパート（百貨店）および呉服店

新田日本店 (写真5-8)	秋田市廣小路通りに油絵大廣告を看板とせる新田日本店は秋田唯一のデパートメントストア式大店舗にして衣食住に必要な呉服太物洋雑貨飲食料品等各階級を通じ最も豊富に準備しあり一度其店頭に立たば殆ど総ての用品を整ひ得べく品質優良にして一般の趣味嗜好に適し秋田県流行界魁を以て自他共に許す常に電話の注文も夥しく店内活気に満ち信用汎し
木内雑貨店 (写真9)	秋田停車場通りの要位を占め各官営学校等を得意とする木内雑貨店は店主木内隆一氏の明敏なる頭脳と鮮なる手腕とにより年と共に発展しつつあるが内外雑貨、測量製の機械、文房具一式、運動用具、眼鏡等絶えず豊富に仕入れられており流行に遅れず品質優良にして価格に毛厘の掛引などを以て一般の信用厚し
辻呉服店 (写真10)	辻一家の経営するところにして一流の大商店だけありて営業に落付あり絶えず製造元より最新流行品を仕入れ得意の信用を博し顧客常に店頭に賑う。階上には商品陳列室ありて各種の呉服太物類として百花の咲き揃いたるが如く品質を精選し廉価正札の制度を守り商品最も豊富なるを以て遠近よりの注文引きも切らざる状態を呈し店舗も堂々たる構造なり
大島商会 (写真11-12)	帽子一式洋品雑貨商大島商会は秋田県における代表的大商店なり。秋田山下肴町に本店を有し同市長町に大島商会東店を設け秋田駅内に出張店ありてその販路全県内は勿論隣県にまでも及ぶ営業方法は総じて最新式にして豊富なる資金を運用して流行に遅れず品質の優良なるものを提供し商品の仕入れ方法も独自のものである

出所) 小島 (1918)、各頁より作成



写真5 新田目小助商店 (明治後期)

出所) 無明舎 (1984)、29頁



写真6 新田目小助商店店内 (明治後期)

出所) 無明舎 (1984)、40頁



写真7 新田目呉服店 (大正初期)

出所) 脇野 (2009)、93頁



写真8 新田日本店 (大正12年頃)

出所) 無明舎 (1984)、99頁



写真9 木内雑貨店（大正10年頃）
出所）無明舎（1984）、91頁



写真10 辻呉服店（大正11年頃）
出所）無明舎（1984）、95頁



写真11 大島商会本店（大正10年頃）
出所）無明舎（1984）、94頁



写真12 大島商会東店（大正10年頃）
出所）無明舎（1984）、94頁

（4）秋田市における明治－大正期の流行

『秋田市史』（2004）では洋風化に向かう明治期の産業・経済について、「多数を占めたのは大工、裁縫、指物、菓子、鍛冶など市民の日常生活の需要に応じる伝統的職種であった。生活の洋風化に対応した新たな需要に応ずるものとしては、靴・石銅板印刷・時計の他、帽子・自転車修繕・マッチ附木製造・硝子・ペンキ塗り・煉瓦・ラムネ製造・蝙蝠傘修繕・製材があった」と記載があった¹⁴⁾。この背景には洋服仕立職および同請負業について「1898（明治31）年の歩兵第17連隊移駐後はこの需要が大きかった」とされていた¹⁵⁾。その際に、経営形態にも変化があり、「万屋式経営はやゝ専門化されるに至り」とあり、洋酒缶や書籍雑誌なども流行するようになった¹⁶⁾。表5はその他の流行商品をまとめており、ストーブやスキーなど日常生活の中での変化があらわれている。

秋田市において、明治期が西欧の近代文明を模倣した時代であれば、大正期は市民が西欧の近代文明を熟成させる時代になったと考えられる。大正期になり、洋品店や洋装の人々が秋田市に定着するようになった。その一方で大正期には娯楽を受け入れる余裕もでき興業館なども相次いで開館された。秋田市の市民にとって大正期は、明治期の文化や産業が発展する時代となったが、一方で物価の高騰で資本階級と労働者階級の格差が拡大することも注視しなければならない視点である。

表5 秋田市における明治－大正期の流行商品

1887（明治20）年	暖室炉（ストーブ）の使用
1896（明治29）年	自転車の普及
1897（明治30）年	ハンドオルガンの販売
1903（明治36）年	ピアノ・バイオリンの流行
1910（明治43）年	セル地袴の流行
1918（大正7）年	スキーの大衆化
1926（大正15）年	ラジオの普及

出所）無明舎（1988）および原武男（1952）の各頁より作成

4. 考察と今後の研究課題

本研究では明治－大正期における秋田市の百貨店の移り変わりについて考察した。その結果、秋田市では現在とは異なり、明治期には繊維産業が主体であり、呉服店から洋品雑貨を扱うデパートメントストア、つまり百貨店へと円滑に変化させる要因があったと考えられた。また明治期には、首都圏から離れていながらも、明治の新文化をいち早く受入れていた形跡があった。しかしそれらの明治の新文化を受容できたのは一部の特権階級であったが、大正期には確実に市民の時代に成りえたはずである。大正時代には、洋風建築物が拡大し、市民が西洋文化を受容できた。さらに東北地方の中でも大規模な百貨店も形成されていた。このようにデパートメントストア宣言以降に、秋田市では比較的早い段階で首都圏の影響を受けながら近代化が進んだと考えられる。そのため、今後の研究課題は地方都市の中でも先行研究で挙げられていなかった都市の明治－大正期の百貨店の形成を調査する必要がある。また秋田市でも昭和期に同様の場所で商業施設の拡大が起こっている。したがって、秋田市に商業施設に関する発展史をさらに拡大して考えることも必要であるといえる。

注

- 1) 竹中克行編著『人文地理学への招待』、ミネルヴァ書房、2015年、102-103頁。
- 2) 秋田魁新報2021年3月4日付1面を参照。当紙面は2021年3月末でJR秋田駅前の西武秋田店（売り場面積：地下1階から3階）が経営効率化の観点から売り場面積を縮小するという内容であった。なお西武秋田店の前身である「ほんきん西武」は1984年に開店し、2006年に秋田西武として改装され、2009年に現在の名称になった。
- 3) 本節では、日本の百貨店について簡潔に言及している。詳細は、小山周三『現代の百貨店』、日本経済新聞社、1997年や飛田健彦『百貨店とは』国書刊行会、2016年などを参照されたい。また飛田（2016）には世界各国の百貨店の始まりに関する内容も詳細に述べられている。
- 4) 世界の百貨店の始まりは、19世紀中期のフランスである。アリストイッド・ブシコー夫妻は、フランスで女性の布地などを扱う流行品店「ボン・マルシェ」を買い取り、様々な販売の方法を考え出して店舗を拡大させた。バーゲンセールを始めた、ショーウィンドーに商品を展示したりするなど、顧客に人気のある店舗づくりをした。1887年には吹き抜けのある大型店舗を完成させた。その後19世紀末から20世紀にかけて、イギリスやアメリカにもデパートが次々と出現した。
- 5) 飛田健彦『百貨店とは』国書刊行会、2016年、72頁。

- 6) 脇野博『ふるさと秋田市』郷土出版社、2009年、142頁。
- 7) 秋田市編『秋田市史』秋田市、2004年、161頁。
- 8) 今村義孝編『写真集 明治・大正・昭和 秋田 ふるさとの思い出』国書刊行会、1980年、22頁。
- 9) 岩田友記編『目で見える秋田の今昔 岩田友記写真集』岩田写真館、1973年、17-18頁。
- 10) 同、15-16頁。
- 11) 今村義孝編『写真集 明治・大正・昭和 秋田 ふるさとの思い出』国書刊行会、1980年、22頁。
- 12) 秋田魁新報「新田日本店は休業に決す」1923年10月3日付3面。
- 13) 秋田魁新報「新田目の店を県物産館に」1923年10月28日付3面。
- 14) 秋田市編『秋田市史』、秋田市、2004年、406頁。
- 15) 同、417-418頁。
- 16) 秋田県編『秋田県史〔通史編〕第5巻明治篇』秋田県、1977年、868頁。

参考文献

秋田魁新報（該当年月日）。

秋田県編『秋田県史〔通史編〕第5巻明治篇』秋田県、1977年。

秋田市編『秋田市史 第4巻（近現代Ⅰ）』秋田市、2004年。

藤岡里圭『百貨店の生成過程』有斐閣、2006年。

原武男編『秋田県文化史年表 藩制確立以降・日本歴史対照（1602-1951）』秋田図書館資料整理室内、1952年。

小島隆一『秋田県営業案内写真帖』秋田美術写真会、1921年。

小山周三『現代の百貨店』日本経済新聞社、1997年。

今村義孝編『写真集 明治・大正・昭和 秋田 ふるさとの思い出』国書刊行会、1980年。

岩田友記編『目で見える秋田の今昔 岩田友記写真集』岩田写真館、1973年。

無明舎編『思い出のアルバム秋田市 明治・大正篇』無明舎出版、1984年。

無明舎編『秋田県近代総合年表』無明舎出版、1988年。

大岡聡『昭和戦前・戦時期の百貨店と消費社会』「成城大学経済研究所研究報告」成城大学、2009年。

末田智樹『日本百貨店業発展史－会社史で見るデパート経営』ゆまに書房、2022年。

飛田健彦『百貨店とは』国書刊行会、2016年。

竹中克行編著『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房、2015年。

谷内正往・加藤諭『日本の百貨店史－地方、女子店員、高齢化』日本経済評論社、2018年。

脇野博『ふるさと秋田市』郷土出版社、2009年。

キーワード：小売業、デパートメントストア宣言、百貨店

追記および謝辞

平成18年3月に貴学より高等学校教諭（公民）の免許状を授与して頂きました。これを基礎免許状として、高等学校と大学で勤務する傍ら、高等学校教諭（地理歴史）、中学校教諭（社会）、特別支援学校教諭（知・肢）の免許状を取得しました。貴学での学びが小生の貴重な経験につながりました。記して感謝申し上げます。

(ICHIKAWA Takashi)